

● 関 西

よこ 横 はら 原 せん 千 し 史

オオサカ・シオン・ウィンド・オーケストラが、創立100周年を迎え、これを記念して初のアメリカ演奏旅行を行い、芸術顧問の秋山和慶指揮、シカゴで演奏した。今年の演奏会では、ジェームズ・バーンズの交響曲全9曲を取り上げ、CD録音し発売した。予定された作曲者の指揮はかなわなかったが、記念年に相応しい大きな成果といえよう。

テレマン室内オーケストラが創立60周年となり、延原武春指揮でテレマン《マイア受難曲》(1730年版)を初演した。テレマンの協奏曲集も演奏会で取り上げ、優れたCD録音も残した。

オーケストラでは、長年にわたり関西音楽界を牽引してきた3人の巨匠 外山雄三、飯守泰次郎、西村朗の逝去が惜まれる。外山雄三氏は、名古屋フィル音楽監督時代からよく聴いていたが、80年代のその頃は大阪フィルにも頻繁に客演していた。晩年大阪交響楽団との関係を深め、ブラームス、チャイコフスキーや自作曲で、円熟した味わい深い名演を数多く残してくれた。

飯守泰次郎氏は、関西フィルハーモニー管弦楽団との20年以上の濃密な関係の中で、ドイツ音楽の真髄を響かせた。ワーグナーでは21年の名曲集で独特の粘着力のある響きで、内から突き上げるような頂点を生み出した。この見事なワーグナー演奏に対してクリティック・クラブ賞が贈られた。演奏会形式で上演された《ワルキューレ》、《ジークフリート》、《トリスタンとイゾルデ》も印象深い。4月のブラームス交響曲第2番が最後の演奏となった。深い味わいを醸し出す馥郁たる響きの美しさに陶然となった。

西村朗氏は、いずみシンフォニエッタの創設者であり、自作や多くの新作の初演を通じて、関西に現代音楽の常にアクチュアルな場面を生み出し、刺激的な活動を継続してきた。第50回定期演奏会では、新作三重協奏曲《胡蝶夢》を発表し、荘子の「胡蝶の夢」が下敷きとされ、蝶と人間をヴァイオリン(小栗まち絵)とクラリネット(上田希)が担い、ハーブ(篠崎和子)が人間の本性を表現するという。独奏とトゥッティの響きの相克の巧みな効果は西村の得意とするところで、華麗で見事な響きを堪能できた。ISOの音楽監督でもある作曲者が、自らの人生とも重ね合わせて、悲劇的な要素にもじませる。演奏会のブレイクでも打ち上げでも元気な姿を見せていただけに、急逝が信じられないくらいだ。

大阪フィルハーモニー交響楽団は、音楽監督尾高忠明によるブルックナー交響曲第7番とヴェルディ《レクイエム》、ウォルトン交響曲第1番とメンデルスゾーン・チクルスが優れて、強く印象に残る。客演ではデュトワ、ホリガー、独奏ではコバチンスカヤが圧倒的であった。大阪交響楽団は、高橋直史のヒンデミットで、高橋の緻密な音作りが生み出す地獄絵図は、多彩多様で輝かしく、実に聴き応えがあった。山下一史のシューマン(独奏：河村尚子)とメンデルスゾーンは躍動感のある輝かしい演奏であった。日本センチュリー交響楽団は、ヴィトマンのヴァイオリン協奏曲第1番で飯森範親と神尾真由子の独奏が丁々発止の高い緊張で作品の魅力を引き出した。秋山和慶指

揮のベートーヴェン《エロイカ》の近衛版も興味深い試みであった。

関西フィルハーモニー管弦楽団は、デュメイとともに、2回目の欧州演奏旅行を成功させた。また藤岡幸夫による新作シリーズでは、佐藤賢太郎《来たれ、聖霊よ》が心を動かす佳品であった。原田慶太楼指揮のサイ：ヴァイオリン協奏曲(独奏：服部百音)は極めて鮮烈。京都市交響楽団の常任指揮者に就任した沖澤のどかは、コネソンの大作《コスミック・トリロジー》を日本初演して、覇気を表わした。佐渡裕指揮兵庫県立芸術文化センター管弦楽団は、マーラー交響曲第7番で、うねり、のたうち回る作品の一端を見事に捉えた。神戸文化ホール開館50周年を記念して、鈴木秀美指揮神戸市内管弦楽団、神戸市混声合唱団が、ハイドン《天地創造》を緻密に造形して聴き応えがあった。当間修一指揮大阪コレギウム・ムジクが山中千佳子の新作混声合唱とオーケストラのための《夢のたたかい》を初演した。

オペラでは、びわ湖ホールのワーグナー《ニュルンベルクのマイスターシンガー》が、沼尻竜典の音楽監督最後の演目に相応しい素晴らしい感動的な出来であった。沼尻はびわ湖ホール声楽アンサンブルと林光《森は生きている》で楽しい舞台を造り上げた。新監督阪哲郎は、モーツァルト《フィガロの結婚》で、オペラ指揮者ならではの優れた手腕を余すところなく発揮した。オッフエンバック《天国と地獄》も岩田達宗演出で、抱腹絶倒の舞台が楽しめた。みつなかオペラも《フィガロの結婚》で牧村邦彦指揮井原広樹演出、並河寿美、古瀬まきをらの歌唱で生き生きとしたモーツァルトを描き出してくれた。関西歌劇団は、マスネ《サンドリオン》でありきたりなシンデレラ物語とは一味違う視点のフランス・オペラコミックの新鮮な切り口を楽しませてくれた。関西二期会の《カルメン》と《ジュリオ・チェザレ》が優れた出来栄であった。特に後者は短縮版ながら、四方典子(クレオパトラ)を中心にバロックオペラの長所を味わわせくれた。佐渡裕指揮兵庫県立芸術文化センターの《ドン・ジョヴァンニ》では、ドンナ・エルヴィーラのハイディ・スターバーが特に際立っていた。堺シティオペラはドニゼッティ《愛の妙薬》で優れた舞台を造り上げた。

室内楽では、大阪国際室内楽コンクール&フェスタが6年ぶりに開催され、第1部門優勝のクアルテット・インダコは、優勝記念ツアーでの演奏がさらに素晴らしく、驚くべき水準を示してくれた。第2位のほのカルテットはとても魅力的で優勝に肉薄した。演奏会では、関西弦楽四重奏団のベートーヴェン「ラズモフスキー四重奏曲」、神尾真由子、滝千春らのシューベルト弦楽五重奏曲、櫻本大進、フックスらのシューベルト八重奏曲、芦屋国際音楽祭の日下紗矢子を中心とするアンサンブルが際立って優れていた。鷲見恵理子と多川響子のデュオ、荒井里桜と大井駿のデュオも強く印象に残っている。

ピアノでは、河村尚子とメルニコフのデュオによる交響作品、中野慶理のショパンとドビュッシー、油井美加子のラヴェル、土井緑のワーグナー、青井彰のブラームス、法貴彩子のブーレーズ、加藤英雄のベートーヴェンがすぐれていた。